

# 令和元年度 第1回八尾市産業振興会議 議事概要

日 時	令和元年7月3日(水) 15時00分～17時00分
場 所	八尾商工会議所会館 3階 中会議室
出席者	<p>&lt;委員&gt; 忽那座長、滝本副座長、阿部委員、居相委員、樫本委員、梶本委員、佐藤委員、谷原委員、築澤委員、水野委員、美馬委員、三宅委員、山田委員、山本委員 計14名</p> <p>&lt;事務局&gt; 浅川部長、平尾次長兼室長、西野課長、矢野参事、内藤課長補佐、後藤課長補佐、藤原係長、松尾係長、中谷係長、村山、吉田 (運営支援事業者 鈴木氏) 計11名</p> <p>総計25名</p>

－事務局による司会で次第に沿って進行－

## 1. 開 会

事務局より、本日の会議は勝浦委員、高橋委員、寺西委員、梶谷委員、乾委員が欠席。全委員19名のうち14名の委員の出席となっており、八尾市産業振興会議規則第3条に規定する過半数の委員の出席により、本日の会議が成立していることが報告された。配布資料を事務局より確認。

## 2. あいさつ

経済環境部長よりあいさつ

(定期人事異動による委員交代のため)

近畿経済産業局地域経済部地域開発室 室長 谷原委員よりあいさつ

大阪府商工労働総務課企画グループ課長補佐 築澤委員よりあいさつ

## 3. 議 事

－忽那座長による議事進行－

座長：平成30・31年度の産業振興会議では、「10年後の八尾市の産業について」をテーマとし、「八尾市の現状についての認識を深め、10年先を見据えた産業振興のあり方」について検討部会に付託し、議論してきた。本日は、検討部会で議論してきた内容について検討部会委員から報告を頂き、今回、「さらに議論すべき点」「必要な視点」等のご意見を頂きたい。また、それらを受け、今後の検討部会への付託内容についてのご承認を頂きたいと考えている。

### (1) 提言書の三本柱

座長よりここまでの経緯と提言書の三本柱について説明。

座長：ベン図をご覧ください。【資料1のベン図参照】

今後の八尾市の産業が活気あるものになることを観点に、議論を拡散させ、意見を絞り込み、抜けている視点を踏まえ、さらに拡散し、現状取りまとめたものがこの図となる。「Make a Fan (以下ファン)」「Make a Challenge (以下チャレンジ)」「Make a Mentor (以下メンター)」という3つのキーワードに落とし込んだ。ベン図のそれぞれの丸の中にキーワードが書いてある。

まず1点目はブランディング。市民はもちろんのこと、全国・世界という外へ向けての発信という両面

が必要となる。「八尾市が大好き」という郷土愛も含めてファンをつくる必要がある。

2つ目はチャレンジしていこうというもの。イノベーションがキーワードとなる。新しい技術も含めて、八尾市が価値を創造していく場になるようにとの意見があった。議論の中でも、連携していくことが必要ということで「コラボレーション」や、領域をクロスさせることでのかけ算での「クロスイノベーション」、イノベーションを起こすための「シェアリングプラットフォーム」の形成、同質的なものからはイノベーションできないという観点から、「多様性を認め合う」という3つの要素が挙げられた。

3つ目は、相談に乗ってサポートする人になろうというメンターづくり。人財育成をキーワードに、小さい子どもに家業を継いでもらおうということも含めて、新しいものにチャレンジする「起業家教育」、起業しやすいまちにする「起業家育成」、気軽に相談できる環境をつくり、学びながらつながって循環していくようにまちがまるごとメンターになるというもの。

その3つの円を踏まえて、一番上に「Be Makers～創る人になろう」を掲げた。3つの円を機能させうまく連動することによって循環を生み、持続できるようなまちをめざしていく。本日の会議においては、今までの議論を受けて「もっとこうしていこう」という前向きな意見をみなさんからお聞きしたい。

## (2) ワークショップ

事務局よりワークショップについての説明。

チェックイン：3分間で「今の気持ち・活動・今日の期待」を紙に記載し、グループで共有。

## (3) 委員より報告

### 【チャレンジ】

委員：コラボレーションクロスイノベーションについて。

八尾は中小企業が多いまちであり、様々な団体が活動しているが、団体同士の交流はなかった。しかし、それが最近少しずつ変わってきている。私自身も八尾商工会議所青年部、環山楼塾、みせるばやおの3つの団体に所属している。直近では青年部とみせるばやおが交流できるようなイベントも企画されている。新しい出会いが活発になることで、団体を超えたビジネスが生まれる。お互いを認め合い、連携する時流が生まれている。クロスするだけでなく、新しい革新的な事業が生まれる可能性を感じている。みせるばやおでもそのような事例で生まれたコラボ商品がある。友安製作所と木村石鹼工業の天然由来の生活雑貨は大手家電販売店でもすでに販売されている。このような事例は、団体間で交流することにより認識されるスピードも早くなっている。認知することで、「うちもできる」という土壌ができていくのではないだろうか。

私はインキュベートルームの卒業生であり、創業関係にもかかわることが多くある。これをきっかけに40名ほどと知り合い、自然と新しい団体が生まれた。創業者と独自の技術をもった企業をつなぐハブになっていけると感じている。つなぐこと、クロスすることでベンチャーの育ちやすい環境や、オンリーワンの技術をふくめた製品が作られる。

検討部会では、多様性を含んだイノベーションを起こしていけるということを期待しつつ、自らもつくっていく立場であること、これをどうやって実現していくかという議論がなされた。障がい者、LGBT、外国人、高齢者、こどもであること関係なく、自由に発信・活動できる、市民中心のまちづくりをしていくことと、自ら参加していくひとを増やすことが大事である。踏襲型の事業ではなく、フラットでアップデート可能なプロジェクトの型の事業が自然発生的に生まれる環境を「ごちゃまぜコミュニティ」というキーワードのもとで話し合われた。現時点では自然発生するには、まだまだ課題はあり、道のりは長いですが、八尾の10年後をめざし、ビジネスとして様々な人と人をつなげ新たなイノベーションを創出するデザインハウスを八尾で自らの活動として行っていくことで、コラボレーションやクロスイノベーションを起こし

ていくことが可能だと考える。

委員：シェアリングプラットフォームについて。

シェアリングプラットフォームは「人材シェアリング」と「家事・育児などのお困りごとのお助けシェアリング」の大きく2つに分けられる。

まず人材シェアリングについて、近年、起業家、フリーランスが増え、大企業中心に副業が認められる社会となってきた。月に数回だけやりがいを試したいその分野の専門家や、何かに長けているフリーランスたちのプラットフォームをつくることができたらという議論がなされた。ランサーズやクラウドワークスのように気軽に人材・仕事をシェアリングできたらという話。実際に仕事をしたい時、場に関わらず、仕事ができることで女性が社会に増えているように感じる。

しかし、育児や家事がネックになっており、人に頼むには贅沢でハードルが高いように感じる。これをご近所さんに頼むように気軽に、おせっかいなまちならではのシェアリングができたらという意見がでた。

委員：多様性について。

誰もがチャレンジしやすいまちとは、企業の風土を変えていくことで、みんなが働きやすいまちにつながっていくという議論になった。特に今まで活躍の機会が少なかった女性に関しては、ものづくり女子や子連れ出勤が可能な環境の提供等の意見がでた。定年後も働きつづけたいと思う企業風土をシニアに向けて発信していく、外国人に向けては労働者という扱いではなく、幹部社員としての活躍の場を提供する、行政と企業がタッグを組んでチャレンジしやすい環境を整備していくことで誰もがチャレンジしやすいまちが創出するのではないかと議論がまとまった。

注意点としては、企業側が薄く見守ることによって働く人に主体性が生まれていくこと。何かを起こすのではなく、今あるものを少しずつ変えていくことや、働く人、企業、行政が成果や達成感がみえる仕組みを整えることで新たな Makers が生まれていく。

#### 【メンター】

委員：人財育成について。

おせっかいすぎる人財育成をしたい。八尾は 12,000 社の経営のプロが集まるまちで、その経営のプロが小学生から経営を教えるまちにしていきたい。現在、商工会議所の青年部ではジュニアエコノミーカレッジという取り組みを行っている。ここでは小学生が実際のお金を使って、会社設立・企画・販売・決算・納税までを学んでいる。成果としては、子どもたちの中から将来社長になりたいという声や、働く親に感謝しているという声があがったこと。また、小学生だけではなく、中高生、大学生についてもプロの経営者が高度な教育ができる。そこに市民や経営者が関わることによって面白い人財育成ができるのではないだろうか。

また、まちまるごとメンターとしては、地域内の再投資や投資の見える化という市内で応援できる資金の流れをつくり起業家を応援していきたい。

委員：起業家育成について。

八尾で社長になるというスローガンが打ち出されており、2014年5月から八尾市内で本格的に創業をサポートする動きが非常に活発になりつつある。現在、創業塾やチャレンジショップ、インキュベートルーム、緩やかな層を後押しする創業ゆるっとカフェなどが開催されている。それぞれがよい取り組みだが、独立しているので今後は複合してサポートしていけるようにと考えている。例えば、ゆるっとカフェで意欲を高め、個別相談やセミナーを受講するという流れ。また、創業を応援する風土はできつつあるが、さ

らに具体的な制度が整っていくとよいと考えている。例として挙げるならば資金面。創業支援して終わりということではなく、ソーシャルレンディングの動きを活発にし、お金だけではなく余っている土地や店舗などを投資することも面白いのではないかという意見でまとまった。

委員：まちまるごとメンターについて。

私自身、二代目経営者であり、八尾には多くの事業者がいるにも関わらず、跡継ぎがないところが多い。八尾には「環山楼塾」という次世代経営者を育成する塾がある。私も参加したが、そこでは同期生同士がつながりを持ち、悩み事など共有することができた。懇親会で八尾の居酒屋に行くようになり、八尾にお金を落とすことで地元愛も芽生えた。その後のOB会では世代を超えた交流が生まれ、先輩の経験を聞くことによって学ぶ場としても活用できた。また、ノウハウを継承できることは大事だと感じた。持続可能な形で続いていくことで未来につながると感じる。

### 【ファン】

事務局：郷土愛の醸成について。

欠席の委員からのメモを参考にお話しする。郷土愛の醸成は2つのキーワードがある。

まず1点目は企業間連携により八尾で働く若い人たちに元気になってもらうということ。中小企業では新入社員が少ないため、同期がいなくて寂しいという声もあると聞く。そこで企業間連携を通して若い社員同士が交流する機会をつくるということが必要である。例として挙げるならば合同研修や合同運動会で社員同士がつながり郷土愛を育てる。

2点目は価値創造プロジェクト。「働く人にフォーカスする」がキーワードとなり、イケメン職人、看板娘などのグランプリを開催し、ファンができるような環境をつくる。色々なところで「つながりすぎるまち」がキーワードになっている。

補足としては働き続けることが重要になるということ。会社をこえて、人と人とのつながりができることによって、仕事に愛着をもち、働くまちにも愛着をもち、つながることによって学びが循環し働きやすくなる。経営者だけではなく、従業員の方々が幸せに働きつづけることが重要になる。みせるばやおにおいても、従業員がプレゼンテーションする場を設け、自身が認められることによりさらにまちに愛着が持てるような取り組みを行っている。

副座長：外へのファンづくりについて。

ブランディングにおいて、一つにコンセプトを絞ると「つながり」がキーワードとして挙がった。人とのつながりをつくることによって、八尾で働きたいひと、起業したいひとが増えていくのではないかと。社長同士のつながりはあるが、やはり社員同士のつながりは少ない。一人で悩みを抱えるのではなく、八尾に行けば社員同士がつながれる、様々な業種がつながれるということを発信していけば、さらに働きたい人々が八尾に集まるのではないかと。

八尾は様々な業種が集まるまちであり、ネットワークをつくり、仕事の紹介をできればというのが2点目のつながり。大企業でも若手の社員が集まり、コミュニティをつくって取組みを行っている。

また、住民とのつながりが3点目。起業のリスクは大きいため、住民がまちに投資するを通してつながれるまちづくりをめざすという議論もなされた。

事務局からの補足：最近では職人や技術に会いに行くビジネス観光が注目されるようになっている。オンリーワンの技術を持つ企業は八尾にはたくさん存在する。しかし、世界には知られていないのが現状。それを発信することで、海外のデザイナー、クリエイターにも注目してもらい、世界に売り出していくこと

が必要なのではないかというような声もあった。

#### (4)「提言書のアップデート」

どのようなところがアップデートされたか、具体化されたかというところを共有。

#### 【チャレンジ】

委員：色々な事業を実施しているが、見える化のプラットフォームがないために、伝わっていないのではないかという意見がでた。いかにして伝えるかということが重要。また、人財シェアリングという点でも、地域で密着して支え合えるような場所、もっと気軽に参加できる場所（プラットフォーム）をもっともっと増やしていき、認識できるようにしていければということでもとまった。

#### 【ファン】

委員：企業間連携が今後もっと重要になるということを中心に議論した。企業全体でまちを考える、行政と協働していくことを考えないと、住みたいまちにならない。経営者同士が誘ってもお金の話になってしまう。そのようなにならないようには、社長ではなく社員をつなげるような仕組みを作ろうという話になった。そして、社員から社長を引っ張ればいいのではないか。また、まち全体で商売が子どもの頃から学べる、できるような仕組みをつくってはどうか。普通の塾と同じように、まちなかに子どもの頃から商売を教える塾をつくるのがいいのではないかという意見もでた。

#### 【メンター】

委員：小学生から商売を教えていこうという意見が中心であった。学校を巻き込み、小学校の授業のなかでプロが教えていくような基盤ができればいい。見込みのある方がいれば、プロの野球選手を育てるように育てていけばよい。八尾の事業所の中には、ハコがある、ノウハウがある、得意先もあるけど、継ぐ人がいないところが多い。いちから起業するのもいいが、見込みある方がそういった事業を継いでいくような仕組みが八尾にあればいいのではないか。それに対して八尾市民が投資をし、大きなリターンが返ってくるような仕組みがあれば循環していくのではないかという非常に面白い議論となった。

委員：本日初めて参加したがとても活気のある会議だと感じた。最初はどうなることかという印象であったが、目から鱗という意見もあり、自分自身も八尾でやってみたいという気持ちが芽生えた。有意義な時間であった。

(5) 忽那座長からの全体の総括

座長：只今の3つのグループの発表を聞き、追加で今後さらに深掘りをしていくポイントをまとめた。

一つ目のチャレンジのところで言うと、今後深めるべきキーワードは「見える化」だと感じる。様々な活動は実際にやっているが、もっと知ってもらおうということをどのようにすればいいか。重要なのはみんなが気軽に参加できるように入口の部分をもどのように幅広く訴求できるのかということ。

それはファンのグループでも同様で、社員をターゲット（入り口）とし、社長を引っ張るということは、前者と同じく「入口をどうするのか」というのがポイントとなる。また、小さい頃からビジネスに関する塾や教育という観点でいうと、起業家教育をかなり早い段階でしていくというところでもう少し議論するポイントだと感じる。別のタイプの起業家であれば、事業承継だと考えるが、中小企業庁ガイドラインにも掲載している通り、ファミリービジネスの跡継ぎがいれば一番理想ではあるが、跡継ぎがいなければやめてしまうというのはもったいない。ファミリー以外でも跡継ぎの候補者になり得る人がいれば、継いでもらえばよい。子どもに対するビジネス教育、事業承継に関わる見える化、プラットフォームの形成について今後深めていければと考える。これ以外にも事務局と相談し、必要な視点があれば検討し、追加したい。

4. 事務局より連絡

5. 産業政策課長あいさつ

6. 閉会

以上